

仏教保育協会保姆養成所の設立に関する研究ノート

A Research Note about the Establishment of
“Nursery Teacher Training School of Buddhist Nursery and Kindergarten Association”

捧 公志朗¹⁾・古川 伸子²⁾
SASAGE, Koshiro・FURUKAWA, Nobuko

キーワード：仏教保育、保育者養成、保育者養成校史

はじめに ―考察の目的と概要―

本研究は、こども教育宝仙大学の前身である仏教保育協会保姆養成所を対象として、その設立に関する資料をまとめるとともに、当時の教育内容や、養成所の母体となる宝仙学園の創立時の教育に関する考えとの関連性について考察をするものである。また作業を通じ、仏教保育の在り方や現在の大学教育につながる保育者養成の文脈についても考察したい。

本研究は、「1. 仏教保育協会保姆養成所設立の背景」「2. 仏教保育協会保姆養成所の概要」「3. 宝仙学園における養成所の変遷」の3つの項目から構成されている。また、「1. 仏教保育協会保姆養成所設立の背景」に関しては、「1-1. 仏教保育協会の設立」「1-2. 社会事業としての保姆養成所の設立」「1-3. 仏教保育協会保姆養成所と宝仙学園創立のつながり」として、「2. 仏教保育協会保姆養成所の概要」を「2-1. 教育の方針」「2-2. 教育体制と授業」「2-3. 入学生の募集」としてまとめた。各執筆は、「はじめに」「1-2」「1-3」「2-1」「2-3」「3」「結び」を捧が、「1-1」「2-2」を古川が担当した。

1. 仏教保育協会保姆養成所の設立の背景

1-1. 仏教保育協会の設立

「保育」という概念は、明治時代以降、欧米諸国との交流が始まってからのことであり、西欧から次々と来日したキリスト教女性宣教師によって、神戸や横浜において、保育が行われるようになった。キリスト教系保育は、

横浜において、明治4年（1871年）に三人のアメリカ婦人宣教師によって始められたといわれている。

一方で、仏教寺院の存在は、古くから地域の子どもの遊び場であり、地域住民の親しい存在であった。こうした中、大正15年（1926年）の幼稚園令制定により、一般家庭の子どもも次第に幼稚園に入れる家庭が増し、保育者の養成は急がれ、仏教寺院の子弟もキリスト教系の養成校に多く進学する状況となった。この状況に対して、堀緑羊（信元）は仏教寺院の各宗派の連合と団結を主張し、仏教保育者育成のため、「仏教保育協会（現・公益社団法人日本仏教保育協会）」の設立に至ったのである。以下、そうした経緯を、仏教保育協会保姆養成所・主事であった青柳義智代のノートより記していくことにする。

「堀信元氏等により、各宗保育事業経営者の連合と団結が主張せられた。

幸い仏教各宗当局の理解と支援を得、また仏教保育関係者の全幅の賛同と参加を得、昭和3年、御大典の盛儀を記念する事業として仏教保育協会は設立されたのである。会長には前文部政務次官、安藤正純氏を推薦し、副会長には現本所長、富田敦純氏、並びに仏教保育の学術的指導者として、東洋大学教授、関寛之氏が就任し、真宗両派、浄土、真言智豊両派、曹洞、日蓮、天台の各宗より代表者が協会理事となり、仏教各宗共同事業として組織を確立し、また協会の主事には関岡賢一氏が推挙せられた」

協会設立後は、会報の発行、経営者の指導、保育研究会の開催、教材提供等の幅広い活動が行われた。

1) こども教育宝仙大学教授

2) 元・宝仙学園短期大学教授、元・宝仙学園幼稚園園長

「昭和6年協会創立三年の記念事業として帝国教育会

館にて全国仏教保育大会を開催した」

「その大会に於いて仏教保育の普及徹底のために、仏教保育協会保姆養成所設立が満場一致議決せられたのである」

「同年 8 月。協会副会長の富田敦純氏が依頼を受け、感応幼稚園の隣地、三百余坪の地に仏教保育協会保姆養成所を設立すべく確定した」

「昭和 9 年 10 月 17 日 仏教保育協会保姆養成所設立認可を東京府知事に申請す」

「昭和 10 年 1 月 22 日 仏教保育協会理事会開催。講師、職員を決定す

所長 富田敦純

学監 関寛之

幹事 稲垣実秀

主事 青柳義智代

昭和 10 年 3 月 4 日

仏教保育協会保姆養成所の設立を認可せられる」

「昭和 10 年度

4 月 4 日 第一回職員会を東京鉄道ホテルに開催す

4 月 10 日 開校式 及入学式を挙行す 入学生徒 25 名
11 年 3 月 18 日

第一回 卒業証書授与式を挙行 卒業生 23 名

卒業生同窓会あかつき会を創立発会す」

第一回生の卒業生の名簿には、台湾、朝鮮半島からの入学生からの入学生がみられた。東アジアの国々の人々にとっても仏教主義の保育者養成校が望まれていたことがわかる。また、当時の学生数から、時代、社会の変化に左右されたことが想像される。以下は、昭和 11 年以降の 20 年間の入学者数の変遷である。

昭和 11 年 36 名、12 年 39 名、13 年不明、14 年不明、15 年 48 名、16 年 62 名、17 年 63 名、18 年本科 64 名、聴講生 4 名（9 月 20 日別科第一期生 50 名入学）、19 年 93 名、20 年 32 名、21 年 22 名、22 年 6 名、23 年 16 名、24 年 11 名、25 年不明、26 年 9 名、27 年 28 名、28 年不明、29 年不明、30 年 72 名

創立から 21 年間の入学者数の変遷は、時代に翻弄されながら、経営が続けられたことが推察される。戦争中の入学希望者の増加は、師範学校や保育学校に通学するのは徴用をのがれるため、多くの女性が入学を希望したからである。そして戦後、モンペ姿から女性らしい服装への変化を望み、ドレスメーカー系の専門学校に希望する女性が多くファッション系の学校に流れていったため、希望者が激減した。その後、宝仙学園短期大学となつてからは安定した入学希望者が集まるようになった。

1-2. 社会事業としての保姆養成所の設立

仏教保育協会の設立と併行し、現在の学校法人宝仙学園を創立する宝仙寺が行った社会事業の取り組みについて俯瞰してみたい。宝仙寺は、大正 15 年（1926 年）に、寺境内において宝仙寺幼稚園が開設され、宝仙学園創立者である富田敦純が園長として就任し、幼児教育をスタートさせている。そして、昭和 2 年（1927 年）、宝仙寺幼稚園が感応幼稚園（現・宝仙学園幼稚園）として更改するとともに、翌年、中野高等女学校（現・宝仙学園中学校・高等学校）の開校を機に、宝仙学園が創立をする。

こうした学園創立の文脈に先立ち、宝仙寺幼稚園の一室を利用し、園開設年 10 月に、児童健康相談所が設置されていることは重要な点である。この相談所設置について、富田は、「寺院が為すべき社会事業の数ある中、特にこの種の事業を選んだのは、宝仙寺を中心とする地域が住宅街であつて、所詮生々しい社会事業を必要としない。加うるに是の如き状態にあつて、最も相応しい事業は子供を相手とするものであつて、特に乳幼児の死亡率の多い我が国にとっては、乳幼児の健康増進育児知識の普及こそ最も急務であると信じたからである」（※ 1）と、自身の考えを残している。当時の宝仙寺は社会事業部を置き、教育事業や、地域社会のための奉仕活動に力を注いでいる寺院として認知されていた。「乳幼児の健康増進育児知識の普及」を目指した宝仙寺の児童健康相談所は、昭和 2 年（1927 年）に、相談所利用の母親を中心とした母の会を開催するとともに、同 3 年（1928 年）より赤ん坊審査会を行うなどの活動を展開し、東京府や中野町より助成金が交付されるに至るまでの社会的評価を得ていく。

そして、宝仙寺の取り組む乳幼児を対象とする社会事業と、教育機関としての宝仙学園の創立が重なる中で、昭和 10 年（1935 年）、現在のこども教育宝仙大学の前身である仏教保育協会保姆養成所が設立されていく。この経緯は昭和 6 年（1931 年）7 月に開催された仏教保育協会主催・全国仏教保育大会において、仏教保育の普及徹底と進歩向上をはかることを目的に、保姆養成所開設を決議したことに始まる。だが、校地や資金の調達において困難を極め、この段階では、保姆養成所の場所は宝仙寺として決定されていない。同 9 年（1934 年）6 月に開催された仏教保育協会理事会において、翌年 4 月の保姆養成所開設が決定され、最終的に校地を宝仙寺が提供し、設立費は各宗務所補助金や篤志寺院の寄付金を募り、不足分を宝仙寺が負担することで、仏教保育協会保姆養成所が宝仙学園に設立されることになったのである。



感応幼稚園園舎と仏教保育協会保母養成所校舎（2階）、左上肖像写真・富田敦純（写真：宝仙学園アーカイブ室所蔵）

1-3. 仏教保育協会保母養成所と宝仙学園創立のつながり

仏教保育協会保母養成所が宝仙学園において設立される文脈は、創立者である富田の学園創立に対する意思が、宝仙寺が行っていた寺院としての社会事業の展開や、新義真言宗豊山派管長としての自身が信じる教育観と邂逅することにより生み出された（＊2）。このことは、昭和2年（1927年）の感応幼稚園創立年に設立許可申請を出願し、翌3年（1928年）に開学する中野高等女学校の『中野高等女学校設立要旨』（＊3）に明示される内容により推察される。『中野高等女学校設立要旨』は、富田が昭和2年（1927年）11月15日に発行し、14項目にわたる設立要旨が記されているものであるが、とりわけ、その中の「3. 教育活動を選びたる理由」と「12. 保母と社会婦」は、宝仙学園が仏教保育協会保母養成所を設立するに至った資料として重要な文書であろう。以下、その要旨を抜粋しておきたい。

『中野高等女学校設立要旨』

「3. 教育を選びたる理由

私は寺院の模範的経営の上から出発致しまして、茲に教育活動を選んだのであります。（中略）尚一つの理由は、我が真言宗の開祖、弘法大師は我が国文化史上、平安朝芸術に対して、あらゆる方面に一大進境を開拓せられて居りますが、就中、我が国の普及教育は弘法大師が開祖であります。彼の有名な綜芸種智院がそれであります。弘法大師の綜芸種智院式に

大唐（支那を指す）域には坊々に閭塾を置いて普く童稚を教え、県々に郷学を開いて広く青衿を導く、是の故に才子域に満ち芸士国に盈てり、今は華城（京都を指す）には只々一大学のみ有って、閭塾有ることなし、是の故に貧賤の子弟、津を問うに所なく、遠方の好事往還するに疲れ多し、今、此の一院

（綜芸種智院）を建てて普く瞳蒙を済わん。

とありますが、其の当時、京都には一大官学があったが、其の外には学校と云うものはなかったのです。弘法大師は支那に留学せられて、支那では都の町々に学校があり、また各県にも学校があるが、我が国には一大官学の外学校がないから貴族は教育を受けることが出来るが貧乏人は教育を受けることは出来ぬ、依って綜芸種智院を建てて貧富貴賤の別なく教育しようと云う御趣旨であったのであります。

然るに来る昭和九年が、我が弘法大師の一千一百年御遠忌に当るのです。此の御遠忌に報恩事業の一つとして、我が弘法大師の芳躅を継ぎて教育事業を企てたのです。即ち昭和九年までに、中野高等女学校を完成し、外に保母科と社会婦科をも併置し、出来得るならば、図書館をも観るに足るような準備したい念願なのです。（後略）」（＊4）

「12. 保母と社会婦

前にも申し上げた如く、今後の寺院は大いに目醒めねばなりません。若し果して目醒めたとしたならば、寺院は種々の社会的施設を営むでありましょう。私の考えとしては其の中最も多いのは、寺院の一部を開放して児童の遊び場とすることであろうと思います。此の遊び場を、幼稚園と云う形にするか、託児所的にするか、若くは公園式にするか其の他にも種々の方法がありましょう。若し幼稚園とか託児所とか云う形を取った場合には、是非保母が必要であります。ところが、保母養成所なるものは、官立師範学校か、若くは基督教系の学校のみであって、遺憾乍ら仏教系の学校には其の施設がないのであります。故に信仰ある保母と云えば、基督教系にはあるが仏教系にはないと云う奇現象を呈して居ります。是れは仏教系には之を標榜する機関がないからであります。茲に於て我が中野高等女学校は、仏教唯一の保母養成機関として生命附けたいのです。

是れと同時に社会婦をも養成したいのであります。（中略）社会婦とは社会事業に従事する婦人で、我が国の看護婦が一定の資格を要するように、社会事業に従事する婦人に、一定の資格を認めるものです。（後略）」（＊5）

富田は、「3. 教育を選びたる理由」において、弘法大師の綜芸種智院設立を理想の事例とし、寺院が教育活動を社会的に行うことの意義を確認している。またその上で、昭和9年（1934年）を学園完成の目標として事業を進めていくことを宣言したのである。本レポートの「1-2. 宝仙学園の創立と仏教保育協会保母養成所の設立

のつながり」にも記したように、昭和9年とは、6月に仏教保育協会理事会において保姆養成所開設の意向が決定され、校地を宝仙寺とし、仏教保育協会保姆養成所が宝仙学園に設立されることになった年である。それまで継続された宝仙寺における教育活動が、社会事業として仏教保育協会からも評価を受け、弘法大師の御遠忌を機に保姆養成所が誕生したと推察される。こうした『中野高等女学校設立要旨』に見る宝仙学園の創立は、宝仙寺中興五百年を記念した取り組みであったことも「14. 唯一の奉謝」(*6)の中に記されており、宝仙寺第五十世住職であった富田の、宗教家としての強い社会的使命感を物語っている。

また、「12. 保姆と社会婦」において注目すべきことは、中野高等女学校の設立要旨でありながら、仏教保育の発展を含めている点と、資格を持って社会に参画する女性のための養成を展望に据えている点である。この社会婦の養成に対する富田の思いは、後に宝仙学園が仏教保育協会保姆養成所を設立していくことを明示するものであると考えられる。また富田は、中野高等女学校の設立と仏教保育協会保姆養成所のつながりについて、昭和13年(1938年)に発行された『登々勢の営み 宝仙寺社会奉仕拾年誌』の中で次のような回想を残している。

「仏教保育協会が設立せられたのは今より十年前で、会長には安藤正純君、副会長には関寛之君と私が就職した。私は中野高等女学校を創立する趣旨書の中に、将来出来得るならば中野高女には保姆養成所と社会婦(是は独逸にはあるが日本にはない)養成所を設置したいものだとして置いた。恐らく此の趣意書が因をなして私が副会長に推されたのかも知れぬ。元来、仏教家は常に後手のみ打って居る。基督教では二十年前から幾多の保姆養成所を持って居るのに、仏教側は一つも持って居らぬ。故に仏教主義の保姆があっても之を標榜する機関がない。そこで宗教的に分類すれば基督教の保姆と他の保姆と云うような観を呈し実に仏教の面目にも関する問題である。私は仏教保姆の中央機関としても其の養成所の必要性を痛感して居た。仏教保育協会も少々私の所見と同じようなものがあって、其の設立当時より養成所の必要性を感じ毎回々々議題となった」(*7)

仏教保育協会保姆養成所の設立は、宝仙学園創立者の富田にとっても仏教保育協会にとっても、双方の悲願の結晶だったのである。

2. 仏教保育協会保姆養成所の概要

2-1. 教育の方針

昭和10年(1935年)1月、仏教保育協会理事会におい

て、職員と講師が決定し、宝仙学園創立者の富田敦純が仏教保育協会保姆養成所・初代所長として就任。養成所設立にあたり、その教育方針について、所長の富田は、その骨子となる五つの考えを、『仏教保育 第十四号』の中で次のように示した。(*8)

- 一「本所は通仏教主義によって人格陶冶をしようと思う」
- 二「本所は通仏教主義によって人格陶冶をはかるけれども、仏教各宗派の教理教條を忘れない」
- 三「本所は全学校を以て、大家族と看做す」
- 四「本所は仏教主義によって人格を陶冶するが、その究意は、国家主義的理想の現実に寄与せんがためである」
- 五「本所は最新最合理的の保育技術を体得せしめたいと思う」

この五つの骨子は、宝仙学園短期大学(現・こども教育宝仙大学)名誉教授の小林美実により、以下のように要約されている。項目の番記を合わせ、富田の示した考えと対応させてみたい。(*9)

- 一「教育活動と宗教活動が一致すること、本所は宗教教育によって行うことを明記する。しかし、仏教には種々の立場、即ち宗派がある。その教理教條の差異を超えた共通点、即ち、教育的見地から見た、敬虔、慈悲、感謝、奉仕より人格陶冶を行う、としている。養成所が、仏教保育協会という各宗派の連合体から生まれた校であることから、宗派をどのように結束させ、協力体制を維持するか、と云う問題は、特に重要であったと考える」
- 二「「一」において、各宗派を超えた汎仏教精神の教育を謳ったが、ここでは各宗派の立場を認め、自己に最適な教理教條に共鳴して入信する、と云う事実を尊重している。即ち、「一」では、一般的人格の陶冶を、「二」では、個人の入信を通しての信仰の必要性を謳っていると云えよう」
- 三「信仰は、宗教的雰囲気 of 濃厚な有機的生活、即ち、家族的生活に生徒を置くことにより養われる。教育の精神は、家族精神の延長たるべき、としている。将来のその具体的な方法として、寄宿舎設置をあげているが、明記されていないことではあるが、師弟同行の学校生活、少人数教育の精神があると思う。特に少人数教育は、富田敦純が設立した中野高等女学校の教育方針の重要な柱の一つでもある」
- 四「人格陶冶の骨子たる情操教育は、歴史の築いた累積感情を離れては不可能。仏教主義の個人育成は、

国家主義の一員育成と一致すべきもの、としている。当時の我が国の政治体制から考えると、この柱は、その時代の国家の方針を意識したものと考察される」

五「教育は、人と術との渾一的優秀によって行われるもので、どちらに片寄ることも否であるとし、更に、信仰を胸奥に秘め、科学の衣服を着けて進むべき、としている。特に、保育科学は、基礎・応用を問わず日進月歩であり、常に最新の真理を求めること、実際（実践）と理論の一致に怠らず研鑽をつむこととしている。自学自習をすすめる、この柱から感じ取れる新進の気性、積極性、及び理論と実践の結合等は、本所の校風として受けつがれていると云えよう。最後に、本所が保育現場に送り出す保育者像を、次の様に描き、まとめとしている。要するに、仏教精神によって人格を陶冶し、最新科学によって技術を修練し、以て信念の身に科学の衣服を着けた所の白樺の如き清浄な乙女達を保育の野に送って、その心から滴が落ちては若き芽生えを育てていくように、と念願するのである」

仏教保育協会保母養成所の設立に対する教育理念は、現在のこども教育宝仙大学が行う教育においても受け継がれている思想であろう。とりわけ、「最新最合理的の保育技術を体得せしめたい」とする創立者の願いは、創立90周年を経た現在の四年制大学へと進化した教育体制に結ばれているものであり、また、現在の大学の一教育特色である少人数教育も、富田が理想とした家族的精神を大切にしたい教育形態が生き続けているものだと考えられる。

2-2. 教育体制と授業

ここでは仏教保育保母養成所において、仏教主義による保育者養成の教育体制を記すとともに、卒業生への聞き取り調査等により、当時の講師陣の授業内容を探ってみよう。調査では、授業に厳しかった教員との親しい関係が持たれ、学生は一年間という短期間の中で、保育者としての心得を教員から学んでいたことがわかる。

○授業科目と担当講師（昭和10年度～14年度）

- ・専門理論科目：
 - 「修身」（富田敦純）、「教育」（堀定正、大村桂蔵）、「心理」（関寛之）、「保育」（関寛之）、「社会事業・社会教育」（朝原梅一）
- ・専門演習・実技科目：
 - 「図工」（菅野康、土田文雄）、「手工」（ト部たみ）、「音楽（声楽）」（権藤円立）、「音楽（器楽）」（香川

鈴）、「遊戯」（賀来琢磨）、「観察」（堀七蔵、小川文代）、「談話」（内山憲尚）

- ・宗教科目：「仏教概論」（高神覚昇）、「宗教哲学概論」（田淵正範）
- ・実習科目：「実習」（青柳義智代）
- *「仏教課外各宗教講座」が開講し、真宗、浄土宗、真言宗豊山派、同智山派、曹洞宗、日蓮宗、天台宗の各宗派より講師が派遣される

○授業科目と担当講師（昭和15年度～20年度）

- ・専門理論科目：
 - 「修身」（富田敦純）、「教育」（大村桂蔵）、「心理」（三木安正）、「保育」（関寛之）、「社会事業・社会教育」（朝原梅一）
- ・専門演習・実技科目：
 - 「図工」（土田文雄）、「手工」（ト部たみ、青柳節子）、「音楽（声楽）」（権藤円立、香川鈴）、「音楽（器楽）」（香川鈴）、「遊戯」（賀来琢磨）、「観察」（小川文代、栗山重）、「談話」（内山憲尚）、「育児」（山本杉）、「体錬」（高川まさお）
- ・宗教科目：「宗教哲学概論」（田淵正範）
- ・実習科目：「実習」（青柳義智代）

○科目担当者、授業等の紹介（抜粋）

- ・富田敦純（所長 担当科目：「修身」）
 仏教の教えについて、仏教保育協会副会長である富田が講義を担当した。
- ・関寛之（東洋大学教授 担当科目：「心理」「保育」）
 児童心理学者の関は、長崎県小浜の網元の家の四男として生まれる。『訓育及び保育の基礎たる宗教』（*10）に示された「教育の理想は哲学などに発し、教育の方法は児童心理学に基づくものと思惟して両者を判然とする考は誤っている」との考えに即し、仏教寺院の幼稚園での具体的な保育方法を講義されたと推察される。授業は厳しく緊張する時間であったと、実際の授業を受けた卒業生の談話が残されている。
- ・香川鈴（ピアニスト 担当科目：「器楽」「声楽」）
 レッソンは厳しく指導されたとの卒業生の談話が残っている。戦争中は学内に泊まり、授業を行っていた。
- ・賀来琢磨（児童舞踊家 担当科目：「遊戯」）
 禅の心得を基として、倉橋惣三、青柳義智代の影響を受けながら舞踊の創作を行い、昭和4年、タンダバハ舞踊研究所を設立。「保育は準備なり／形は心のシュリエット／自由の中に規律あり 継続 努力くじけない／教育は合掌に始まり合掌に終わる／頭

で考え 胸であたため 身体で表現」を教育標語とし、徹底した2時間(120分)の授業が行われた。

- ・内山憲尚(口演童話家 担当科目:「談話」)
児童文化研究、仏教日旺学校の普及に尽力し、口演童話を指導した。内山自身も、幼稚園、保育者養成校を設立。
- ・山本杉(医学博士 担当科目:「育児」)
全国仏教婦人会会長、参議員等も務めた。授業は厳しく、脇見をしても叱られたが、個人的な相談にも親身になってくれたとの卒業生の談話が残されている。
- ・青柳義智代(主事 担当科目:「実習」)
長野県に生まれた青柳は、宝仙寺が行っていた社会事業に参加し、感応幼稚園の創立より宝仙学園に関わる。養成所開校後は、「実習」担当の他に、学生指導や当時の学生寮であった「あかつき寮」の管理、教授陣の配置や依頼等の教務にわたるまで、大学業務の全般を行う。学生への指導は入学から就職まで徹底し、実習先の決定、日常的な保育者としての心得、履歴書の書き方まで行い、学生からの信頼も厚かった。



保姆養成所の講師と学生(左端・青柳義智代、左より2人目・菅野康、右端・関寛之、右より4人目・賀来琢磨)
(写真:宝仙学園アーカイブ室所蔵)

ここで、仏教保育協会保姆養成所の授業について、第9回生の藤井かつら氏の談話を紹介し、卒業生の回想に触れてみたい。

「私はソウルで生まれ、女学生になる時、東京に戻りました。そして、中野高等女学校に入学しました。卒業の時、進学先をどうしようかと迷っておりましたが、すぐお隣の保姆養成所を受験することにしました。同級生は7人も受験希望者がおりましたので、入学できるか心配でした。面接の時、関先生からの質問に答えられませんでした。「あなたは新聞を読んでいますか」とおっ

しゃったのを忘れることができません。関先生は、お授業中はとても厳しく怖い先生という印象を持っていました。けれど、箱根の山に遠足にまいりました時、ソックスを両手にはめてピュンピュン跳ねて、「カエルだよ」と。その上、滑ってころんで。授業中の厳しい先生の姿に、皆楽しく笑いころげました。楽しい思い出です。妹たち二人も、女学校五年生と四年生でしたが、徴用逃れのため、養成所に入学しましたが、戦争がひどくなり、幼稚園も閉鎖になり、青柳先生も戦争に行かれたことを覚えています」

2-3. 入学生の募集

昭和9年(1934年)10月17日、東京府知事に対して保姆養成所設立の認可申請が行われ、同年11月30日、校舎の落成式が挙行され、3300㎡の校地のなかに、教室2室、音楽練習室3室、教員室1室などを含む241㎡の規模の校舎がつくられた。そして、学生の募集が開始し、『仏教保育 第十四号』において、以下の「入学案内」が掲載された。(*11)

「入学案内

- 一、本所の設立は仏教保育協会が多年の宿願であったもので、全国の仏教主義の幼稚園、託児所の充実、発展のために理想的な保姆を育成するのが目的であります。
- 一、本所は本協会の趣旨に従って、公共的精神をもって経営せらるるは勿論のこと、全国唯一の各宗共同事業であることが、本所の最も大なる強みでありまた特色であります。
- 一、本所は帝都の名刹宝仙寺の境内にあります。都会には希にみる鬱蒼たる大緑林に囲まれた静寂なる環境でありまして、同寺経営の中野高等女学校並に感応幼稚園に隣し敷地一千余坪、広い校庭と理想的設備と相俟って帝都のみならず、全国にも有数な保姆養成所であります。
- 一、交通は新宿より西武電車、若しくは市街自動車(青バス)を利用すれば、僅かの五分で宝仙寺前停留所に達します。又省線電車中野駅で下車すれば徒歩十分(青バス利用して五分)其の他道路の整備、交通の利便全く申分のない場所であります。
- 一、入学希望者は本所所定の書式によって入学願書に履歴書、身体検査書、学業操行考查書を添えて差出して下さい。
- 一、出願期日は毎年二月一日より三月二十五日まで
- 一、募集定員 六十名
- 一、入学資格は高等女学校卒業ですが、高等女学校を卒業しない保姆志願者のための聴講生制度もあり

ます。

一、費用 入学金 二円 月謝 五円

一、特典 全国唯一の仏教各宗共同事業でありまして卒業生は全国の仏教主義の幼稚園託児所に就職する利便があります。

一、規則書及入学案内書は申込次第御送りいたします。

東京市中野区宮前町四十八番地

仏教保育協会保母養成所

電話 中野三二八〇番

昭和10年（1935年）3月4日、仏教保育協会保母養成所の設置が認可される。養成所は、修業年限一ヶ年、入学定員40名の本科生と聴講生にて構成された。

3. 宝仙学園における保育者養成校の変遷

仏教保育協会保母養成所として開学した宝仙学園の保育者養成校は、その後、時代とともに教育体制が変化する。以下は、宝仙学園における保育者養成校の歴史的変遷の概略である。

- ・昭和元年（1926年）、宝仙寺第五十世住職富田敦純僧正、中野高等女学校設立を発願
- ・昭和2年（1927年）、感応幼稚園が創立
- ・昭和3年（1928年）、中野高等女学校が設立
- ・昭和10年（1935年）、仏教保育協会保母養成所が設立。感応幼稚園の2階に養成所の教室を設置し、幼稚園において教育実習が開始される
- ・昭和14年（1939年）、養成所名を、仏教保育協会中野保母養成所に改名
- ・昭和19年（1944年）、養成所名を、中野保母養成所に改名
- ・昭和21年（1946年）、養成所名を、中野高等保育学校に改名
- ・昭和26年（1951年）、宝仙学園が財団法人より学校法人に組織変更されるに伴い、学校名を、宝仙学園短期大学に改名し、保育科を設置
- ・昭和39年（1964年）、保育科に加え、生活芸術科を新設し、二科体制の短期大学となる
- ・平成21年（2009年）、幼児教育・保育者養成専門の四年制大学として、こども教育宝仙大学が開学

結び

宝仙学園における保育者養成校の歴史は、85年になろうとしている。この事実、仏教保育という思想が生まれ、その母体となる仏教保育協会が創設した保母養成所

が、今日もなお生き続けている証しに他ならない。人間生活の基盤となる宗教や思想が、教育とどのようにつながり、未来の社会を創っていくのかという実践的思考は、今後もつきることなく、大学教育の中で展開されていくであろう。今回の研究での対象となった仏教保育協会保母養成所の成り立ちの考察、また、時代を遡り養成所設立時の状況を想像する経験を通じ、現在の大学教育における保育者養成校としての在り方を再確認出来たことを強く感じている。

仏教保育協会保母養成所に関する資料は、当然のことながら、今回の研究ノートではまとめきれないほどの量が残されている。それらの資料の整理を丁寧継続しながら、仏教保育協会保母養成所が残した保育者養成の意義や教育内容、保育・幼児教育の文化等を、様々なかたちで検証していくことが、筆者らの今後の課題である。本考察を、更に深化させていきたいと思う。末筆ではあるが、考察にあたり、貴重な資料をご提供頂いた小林美実氏、関信夫氏に、聞き取りの取材にご協力を頂いた藤井かつら氏に、心から感謝の意を申し上げたい。

引用文献・注釈

- ・*1：『登々勢の営み 宝仙寺社会奉仕拾年誌』 1938年（昭和13年）編集・発行人 富田敦純 p. 92
- ・*2：昭和7年（1932年）宝仙寺第五十世重職・宝仙学園創立者・富田敦純権大僧正、新義真言宗豊山派管長に就任。（昭和11年（1936年）に満期退任）
- ・*3：『中野高等女学校設立要旨』 1927年（昭和2年）著者・発行人 富田敦純
要旨は、「寺院経営の確信」「寺院の模範的経営」「教育事業を選びたる理由」「特に高等女学校を選びたるに就いて」「中野高等女学校の敷地に就いて」「中野高等女学校の設備」「建築費及び寄付金」「将来の設備」「模範的経営」「人を造れ」「宇宙人格」「保母と社会婦」「報恩事業」「唯一の奉謝」の14項目から編纂された。
- ・*4：同上 p. 4-p. 5
- ・*5：同上 p. 16-p. 17
- ・*6：同上「14. 唯一の奉謝」（p. 18-p. 19）は、要旨の最終項をして記載され、中野高等女学校設立に対する懇願が述べられている。この項目末の、「どうか、皆さん、此の中野高等女学校に依って、宝仙寺中興五百年と、弘法大師壱千壱百年御遠忌とを記念すると同時に、近くは我が宝仙寺と檀徒信徒の連絡を保ち、遠くは女子教育の模範を垂れさせて下さい」とする記述から、学校の設立や、女子教育と宝仙寺の社会事業との関連性が確認される。
- ・*7：『登々勢の営み 宝仙寺社会奉仕拾年誌』 発行年・編集・発行人 同上 p. 9

- ・*8:『仏教保育 第十四号』 1935年(昭和10年 1 月15日)
発行 仏教保育協会
『仏教保育』は、仏教保育協会の機関誌として、1932
年(昭和7年)12月1日に発刊され、協会内の連携
がはかられた。協会設立に尽力をつくした堀緑羊(信
元)が発刊時の編集長を担当。
- ・*9:『(保育科研究報告書 3) 仏教保育協会保姆養成所
の設立と教育 - 設立から昭和二十年までの教育を
中心として-』
1988年(昭和63年) 発行 宝仙学園短期大学保育
科学研究室(発行者 伊東慶樹 保育科長) 編集
宝仙学園短期大学保育科五十年史研究委員会
- ・*10:『訓育及び保育の基礎たる宗教』 1934年(昭和9年)
著者 関寛之 発行 大倉廣文堂 p.71
本書は、仏教保育協会保姆養成所の教科書として使
用されていたと考えられる。
- ・*11:『仏教保育 第十四号』 発行年・発行 同上

参考文献

- ・『中野高等女学校、宝仙学園短期大学年史』 1932年(昭和
9年)～1953年(昭和30年) 記録 青柳義智代
- ・『体験的教育舞踊・児童舞踊論』 2013年 著者 賀来良江
発行 創栄社／三省堂書店 他